

國學院大學學術情報リポジトリ

『玉塵抄』における「テアル・テキル・テヲル」の 用法

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-07-02 キーワード (Ja): テアル, テキル, テヲル, 既然相, 継続相 キーワード (En): 作成者: 山田, 潔, Yamada, Kiyoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000562

『玉塵抄』における「テアル・テキル・テラル」の用法

山田 潔

一 はじめに

表題に掲げたテアル・テキル・テラルは、『玉塵抄』⁽¹⁾の次の用例（句読点を付する）に見られるように、所謂「存続」を表すものであり、文法的な観点から言えば同一の用法と認められる。

山有^リ扶蘇^{サソ} 隠有^リ荷華^{カワ} 扶蘇ハ扶胥ノコトナリ。小ナ
チイサイ木ナリ。 隠有^リウツクシイヨイハチスノ花ナリ。
チイサイ用ニタ、ヌ木ハ山ノ上ニタカアカリシテアルソ。
正シウモナイ邪佞ナ者ハ、高^イ位ニタカアガリシテアルゾ。

蓮花ノ、イサキヨイ、花ノ君子トイワレタヨイ花ハ、サワ
ベノアタリニ、下位ニカマツテイタソ。（一七六五ウ）
存在動詞「ある（あり）・いる（ある）・おる（をり）」の意
味用法の通時的展開については、金水敏氏に詳細綿密な御論考
がある。⁽²⁾ 本稿は、室町末期においてテアル・テキル・テラルは
いかなる意味用法を有するかについて、『玉塵抄』の用例に基
づき、共時論的な分析を試みる。

まず、複製本の巻数に従い「動詞＋テアル・テキル・テラル」
の用例数を示すと、左の如くである。テキルの用例数が多いの
は、『玉塵抄』は人事に関わる記述が多いためである。

テアル	13	63	34
テキル	6	70	27
	21	106	31
	9	87	32
	8	98	37
	8	97	37
	9	57	28
	8	59	22
	6	43	31
	4	72	26
	92	752	305
			計

「動詞＋テアル」の用法を検討する際に手掛かりとなるのは、前代の助動詞タリとの対応である。次のように、訓読語としてはタリが、抄文中にはテアルが、照応する形で現れる。

道不^レ (拾^レ遺^{ヒロウ} ヲテタル) ロシ大道テ物ノヲチテアルヲヒロウテ
 トラヌコトソ (九60オ)

しかしながら、タリ⇨テアルという等式が成立するわけではない。「存続」タリの用法を「存在 (既然相)」「継続 (進行相^③)」に分けた場合、テアルは「存在」、テキルは「継続」を表す点で区別される。しかし、テアルには見られない独自の用法も存する。それらを順次明らかにしていきたい。

二 非情物主語と「テアル」

テアルとテキルの用法で、まず異なるのは、テアルは非情物が主語となるが、テキルは主語とならないことである。テキル

が非情物を主語とするのは次の2例のみである。前者は「水カモルニシタガウテ：ウツリ転シテイタ」という進行を表す故にテキルが用いられていると考えられる (その用法は後述する)。後者は多分に擬人法的である。

1 漏ノ／水カモルニシタガウテ時刻ガウツリ転シテイタソ時
 刻ノウツルヲ転スルト云ソ (二45ウ／46オ)

2 歌器ト云マルイウツワ者アリ十分ナレハスワツテイルソノ
 中ニ水ヲ入ソタラネハソハタチテコホル、ソ (一四42オ)

非情物を主語とするテアルの用例は、格助詞ガ・ノによつて主語が明示されているだけでも96例を数える。たとえば、次のような用例がある。

「空 (ア) ク」イタツラニキセ所カアイテアツタホトニ：ソコ
 ニヤスメテヲイタコトソ (三五81ウ)

「浮ク」此ノ水ノアサイキヨリカルイ石カウイテアルヲトツ
 テタ、ク磬ニスルソ (二四43ウ)

「窪ム」石ノ上ニチカヤヲシイテソノ上坐シテ釣タソ石ニヒサ
 マツイテ釣タトモアリヒサカシラノアトカ石ニクホウテアノ
 タトシタソ (一三15オ／ウ)

「下ガル」ヒサコノヘウタンノ匏ノ大ナカ懸テブラリトサカツ
 テアルソ (四四57ウ)

〔生ズル〕冢^{ツツ}ノ上フルイコゾノ草ナドガ生シテアレハ哭セヌソ

(四六5ウ)

〔透キ通ル〕月ノ中ニハナニモナイソソノ如ク徐モ目カスキト

ヲツテアルホトニキラ^レ明ニヨウミエウズト云ソ(二2ウ)

〔廢(スタ)ル〕鳥ノヲノレト死シ鷹ナドノトツテクイノコイ

タガスタツテアルソ(二五53ウ)

〔ソバタツ〕春ノ末山ノ雪ノソハタツテアル如ナソ(三七12ウ)

〔聳ユル〕昔カラアル山カ今モランカン打ムカウテソヒエテア

ルソ(二六29ウ)

〔溜(タ)マル〕ソレニヒタイエ桜カヲチテタマツテアツタソ

(二134オ)

〔デク(出来)ル〕梨ノ白イ花ノサク時ニヨイ酒ガデキテアル

ホドニ^ニ時分ヲマチマウケテカウテノムソ(一八13オ)

〔似ル〕陽(燧)ハ火ウチナリタルノナリガ火ウチニ似テソア

ルラウ(一九3オ)

〔乱ルル〕水草ノアソコ、ニミタレテアルヲツツネモトメテト

ルソ(七66オ)

〔汚ルル〕手ニトルコトヲサセラレヌ心ハ人ガホシ心ヲツクル

ホドニ欲心ニ財宝カヨコレテアルホトニソ(五12オ)

かつて述べたことであるが、ロドリゲスは『日本大文典』で

能動動詞・受動動詞でないものを「中性動詞」と呼び、その中で使役形・命令形を持たないものを「絶対中性動詞(verb_o neutro absolutivo)」として説明している。すなわち、自動詞の中の非意志動詞であり、本居春庭『詞通路』の「おのづから然る」動詞に当たる。右に挙げた動詞はそれに属する。現代語では「ている」が用いられるが、『玉塵抄』では、右の用例が示すようにテアル専用である。

右の動詞のもう一つの特徴は、動作動詞ではなく状態動詞であることである。金田一春彦氏の「第四種の動詞」に当たり、現代語では通常「〜ている」を付して用いられる。

さて、「存続」の用法を「存在(既然相)」と「継続(進行相)」に分けた場合、テアルは「存在」、テキルは「継続」を表す。それはアルが状態動詞(非意志動詞)であるのに対し、キルは元来「坐る」の意の動作動詞(意志動詞)であり、補助動詞化しても、意志動詞の性格を有するという相違に基づく。次の諸例は同一の動詞にテアル・テキルが下接しているが、非意志的・意志的の観点からその相違を捉えることができる。

〔静カニスル〕風モ吹ズ日モシツカニシテアレハ蝶ガキテ花ニ
タワムレ吸テ遊ソ(四四31オ)

ヒナノ子ドモガ崔カヒマアツテシツカニシテイタ時ハソバエ

キテナレナツイタソ (二七七ウ)

〔敷ク〕紅ノ花ノヲチテ庭ニシイテアルヲ酒ニヨウテシキムシ
ロシトネニシテ花ノ上ニ坐シタ／ソ (二三13ウ／14オ)

木ノ上巢ノヤウニシテ木ノ枝ヲシイテイラレタソ (五〇48オ)

〔添(副)フ〕猫ノ食ノ飯ニ溪魚ノソウテアルヲ語タソ

(四三23オ)

字ハ景純ナリ博^{ハク}学ナ者ナリソコエイテ此ニソウテイテ学シタ
ソ (二六31オ)

〔並ブ〕面白山カイクツモナラウデアアルヲナガメ愛シタソ

(二37オ)

黄鳥ハウグイスソニツナラウテイタソ (四四21ウ)

〔ヒツソフ(↑引キ添フ)〕竹ヲワレハ中ニウスイ皮カ竹ノハタ

ニヒツソウテアルソ (五二44オ)

旅賁^{ホコタテ}氏ノ官ハ矛盾ヲ手ニトツテ王ノ車ノワキニヒツソウテイ
ルソ (三一54オ)

非情物が主語の場合は、その述語はおおむね状態動詞(非意志動詞)であるから、自動詞に分類されるが、他動詞の用例が稀に見られる。

3 吾窓ノ前ニノ葉カ紅ニシテテリヒカラカイテ窓ヲテラシテ
アル (二四41ウ／42オ)

4 琅(玕)ハタマナリタネシナ多ソ五色ヲ具シテアルソマア
ヲナヲ葉ニツカウソ (三三11オ)

「葉」「琅玕」が「テラシテアル」「五色ヲ」具シテアル」の主格に当たる。非情物が主語であるから、テキルを用いることができないのであろう。

さて、現代語で「である」は「絵が懸けてある」のように、主として「他動詞＋である」の表現形式で用いられる。『玉塵抄』でもその用例が7例ほど見られる。

5 ソノモトニ千本ハカリ柳カナミウエテアツタソ (二三38オ)

6 天子ノミクラ米カミチツンテアルソ (二五1オ)

7 北国ヂヤホトニ毎年年山ニ堅氷カツンテアルソ (二二19ウ)

8 簪(々)ハ物ノシゲリテソレガスクレテツミカサネテアル

心ソ (二二7オ)

9 帛カツミカサネテアツタソ (三二37オ)

10 閣ノ東ノカヘニ詩カ、イテアツタソ (二二32オ)

11 亭ノ南ニ松ヤ果ノナル木カツヅイテウエテアルソ (一五79ウ)

主格とも対格とも解し得るノ格の用例も「水ノタ、エテアル大河(一1オ)」「三方水ノ引マワイテアル村(三一46ウ)」「麻ノハタケニウエソロウテアル(五一3ウ)」「ヤワ／＼ト草ノウエテアル(三九19ウ)」のように現れる。

エテアル(三九19ウ)」のように現れる。

周知の如く、主格助詞ガによって表示されながら、意味上は述語用言の目的語になっているものを、時枝誠記氏は「対象語格」と命名した。しかし、必要なはどのようにして右の「他動詞＋てある」が生じたかの文法的解明であり、今後の課題となる。

三 「テアル」の三用法

冒頭に、テアルは「存続」の用法のうち「存在（既然相）」を表すと述べたが、それは、状態性（現にそうある）・恒常性（常にそうある）・完了性（すでにそうある）に三分類される。

まず、状態性（現にそうある）は、言語主体の置かれた現在から見て「そうである」ことを表すものであり、次の用例が手掛かりになる。

- 1 四番メノ丹ノ名ヲ朱（丹）雲（丹）ト云タカ丹ハアカシト
 ヨムソ葉ノ色ガ赤ウコソアルラウソ光テテリくトアルソ
 又アライ碧ナ雲ノヤウナ色モマシツテアルラウソ

（二五七オ）

前代の助動詞ラムは、それ自体が「現在推量」を表すのに対し、この時代のラウは「現在」の意味を前接語に譲り、ラウは

多く係助詞と呼応して確かな推量を表す用法に移行している。

それゆえに前接語にはアルが多く（143例中120例）現れる⁵。傍線で示したように、「形容詞＋アル」「副詞＋アル」の用いられている文脈で「マシツテアル」が用いられている。したがって、「アル」が上接の副詞・形容詞によって示される状態にあることを表すのと同様に、「マシツテアル」は、動詞の表す動作性をテによって状態性に変換した上でテの用法は多岐に亘るが、ここではそう考えておく。「アル」が現在そのようにあることを表現していると考えられる。それ故、「マシツテアルラウソ」は「混じっているのだから」の意となる。

「くシテ」はテアル・テキルともに下接するが、継続性ではなく状態性の場合、次のようにテアルが用いられる。

- 2 ソノ面々タチハ人物ヨウテタケナカウシテアレトモ雨ニヌ
 レテキタハシノモトニ立テイラシムソ（三八四ウ）
 次の3例も状態性の観点から考へることができ。
 3 作^{コトス}レ色ト云ワ：平生ハナニトモナウアルソクニアワヌコ
 トヲ云時ニ色ヲチカエテアルコトソ（二二六ウ）

- 4 貧ニシテカナ（シ）ウシテイウヨリ州ノ守護ノ所エキテア
 ラハヨイコトアラウト云タソ（二五四オ）

- 5 モシ人ノクル、魚ヲウケテクウテ相ヲツイシテアラハタレ

ヤノ人カ魚ヲクワイテコソイルラウト云テクル、者アルマ
 イソソノ為ニウケヌソ (一一三13オ)

用例3で「ナニトモナウアル」と「色ヲチカエテアル」とが
 並列していることに注目したい。用例4「キテアラハ」は、「来
 タラバ」が来るという行為そのものの実現を仮定している（完
 了性仮定）のに対し、来て仕えているならば、という状態性の
 意を含むと考えられる。用例5は、現在は宰相であるから人が
 魚を恵んでくれると言うが、もし宰相の位を下り、無官で日々
 を過ごすような状況になったら、誰も私に魚をくれる者がいな
 いだろうの意である。

以上が状態性の意味である。さらに、この状態性は、恒常性（常
 にそうある）に繋がる。

6人ノクル足ヲトヲキイテ毘タソクル者ノ足ヲトヲキ、シツ
 テ毘タカタ、客人ヲ毘テアルカ。(五51ウ)

右は、「喜タカ」がその時の知人の来訪の喜びを表している
 のに対し、「喜テアルカ」は、平生、常に客人の訪問を歓迎し
 ているという意味合いを有しているものと考えられる。

この恒常性を踏まえると、次の用例の解釈が可能となる。

7清景一^{タヒ}失^{スレハ}後^チ難^シ（模^シ）ヲモシロイ風景ヤ一度トリ
 ハツイテアレハノチニセトリヲコサウトスルニナラヌソニ

度エガタイコトソ (一一六37オ)

右は、原漢文の「失スレバ」を「トリハツイタレバ」ではな
 く、「トリハツイテアレハ」に置き換えている。「已然形+ば」
 の表す3条件のうち、この時期において、偶然確定は「たれば」
 に、必然確定は「ほどに」に置き換えられた結果、「已然形+ば」
 自身は著しく恒常確定に傾いていることを、かつて指摘したこ
 とがある⁶⁾。テアルが恒常性を表すことを勘案すると、この「ト
 リハツイテアレハ」は恒常確定の表現形式であると考えられる。
 すなわち、「美景を写し取る機会をいったん逃したならば、後
 からは決して模写復原できない」の意である。

この恒常確定は、現在または過去の習慣をも表す。

8風モ吹ズ日モシツカニシテアレハ(=温暖な日にはいつも)
 蝶ガキテ花ニタワムレ吸テ遊ソ (四四31オ)

さらに、この恒常性の用法は、一般的な道理を表す用法を派
 生する。「テアル」に続く文末の「者ゾ」は、道理を表すの
 に用いられる。

9人生ハヨロコフコトモカナシイコトモマシリヤウテアル者
 ソカナシイハカリテモナイソウレシイコトハカリモナイ打
 マセテアル者ソ (五一4オ)

第三に、そのことがすでに実現しているという意味での完了

性(＝既然相)が挙げられる。次の2例を比較して説明したい。

10 ミチテ女房ヲミタソ相人カ云コトハ此女人ハ富貴ニアラウ

ト云タソ (一三六1ウ)

11 吾ヲモトメラレハ南山ノ南カ北山ノ北ニカ山居シテアラウ

ズ人間エヅルコトハアルマイト云タソ (六五8オ)

用例10「富貴ニアラウ」は現在富貴であろうと推量しているのではなく、将来富貴になるだろうと相人が占っているのである。それに対し、11「山居シテアラウズ」は、もし今後私を探し求めるようなことがあったら、その時はすでに人間社会を離れ、どこかに山住まいしているであろう(未来完了)ことを述べている。すなわち、テアルは、当該の時点で、そのことがすでに実現しているものとして述べる。

次の用例は「ヤガテ」「ハヤ」と照応して完了性を表している。

12 ヤカテイワイノシルシニサキエモタセテヲコサレテアルト

云テ鏡台ヲ一ダイタソ (二一四ウ)

13 楚ノ君此血ヲ御ス、リアレト云テマワイテス、ラセタソ血

ヲノウタレハ従ハハヤ定テコソアレト云タソ (三四五ウ)

また「テ+コソ(ゾ)アル(ラウ)」にも完了性の用法が認められる。

14 此ヲキイテ召シテツカワレテコソアルラウ (四四13ウ)

15 ソレヲ人ノワルウ云コトヲ知ラセテコソアルラウ (二六41ウ)

16 詩ヲ作テタツタカラカニ吟シテマウテコソアルラウ

(二七28ウ)

17 智恵才能アツテ詩文ナトカイテソアルラウ (二四77ウ)

18 ドノ花ハナニ客トノ花ハナニ客ト云テソアルラウ (一七八オ)

構文上の特徴はないが、次の諸例も文脈からして完了性(既然相)を表していると解し得る。

19 本地ハ仏菩薩ナレドモ人ヲタスケウトテ神トナリテ人ニチ

カツキサイワイヲアタエ罰ヲアラワシテアルガ和光同塵ソ

(二五15ウ)

20 孔宗叢子ノ書トモ寺中ニアツタトキイテアルト云所エキイ

タレハナイト云タソ (一六73オ)

21 某ハ清江ノ水神ノ使者ナリ漁人ノツリウドニトラエラレテ

アルト云ソ (九五オ)

22 吾カ能智才名ヲモチヲウテ身ニソエテアルホトニ自負ト云

ソ (三四4ウ)

以上「動詞連用形+テアル」の用法の特徴として、状態性(現にそうある)・恒常性(常にそうある)・完了性(すでにそうある)の三点を挙げた。

四 「テキル」の用法(二)

「周知のごとく、キルは元来「立つ」の対義語で「座る」の意の変化動詞であった。『玉塵抄』にも次のように「座る(坐する)」の意のキルの用例が認められる。

1 ソレガシトモニ一座ニイテアルニソツトノアイタニ三遺矢
ト云タソ(二八39ウ)

cf 某ト同坐シテアルニソツトノアイタニ三度マテ糞ヲタレタ
ソ(二八40オ)

本動詞キルは本来「座る(坐する)」の意であるから、さすがに「イテイル」とはならず「テアル」が用いられている。しかし、次のように「坐スル」(14例)には、すべてテキルが後接している。すなわち、テキルは、本動詞の「座る」の意味を捨象し、存続を表す補助動詞に移行している。

2 桑ノ木ノモトニ皆坐シテイテヤスタソ(二六72オ)

ただし、表現形式はテキルであっても、次の用例に見られるように、(テ)キルが本動詞に関連する意味合いを有する用例も見られる。その識別は文脈に拠る外は無い。

3 上古八家カナウテ穴ヲホツテイタ(〓そこに住んでいた)

ソ(一三32オ)

cf. 三層ノ高イ楼ヲツクツテソレニ平生イタソ(一三48ウ)

4 鹿門山ニヒツコウテ葉草ヲ服シテイ(〓暮らしてい)タソ
(二二35オ)

さて、前節で扱ったアルは元来存在詞(状態動詞)であるから、無意志動詞である。それゆえに「おのづから然る」動詞を承ける用法が顕著であった。それに対し、キルは、本来動作動詞であるから、意志動詞である。したがって、補助動詞化して存続を表す場合も、意志動詞としての性格を存しているのが、意志動詞を承けることが多い。状態動詞アルと対照的な動作動詞(意志動詞)はスルであるが、テキル752例のうち207例までが上接語はスルであることが、テキルの顕著な特徴になる。

5 門ヨリソトエツルコトヲシライデ学ヲ本ニシテイラレタソ
(一一50ウ)

6 東山エヒツコウテ天下ノ事ニアツカライデ安閑ニシテイタ
ソ(四九30オ)

7 吾ニ敵当ス⁽²⁾琵琶ヒキノ手上手ハアルマイト心ニマンシテ
イタソ(五四34ウ)

8 魯エ飯谷ノ中ニ隠居シテイラレタソ(八18ウ)

テアル・テキルが同一動詞を承ける場合も、テアルはそれを

非意志動詞として扱ひ、テキルは意志動詞として扱ふ。前節で挙げた「静カニスル・敷ク・添(副)フ・並ブ・ヒツソフ」の他に、何語かを追加すれば次の通りである。

〔集マル〕ソコニハ士ヤ大夫ノ官ノ名人カアツマツテアルコト

ハタトエハ冀州ノ此土ニ名馬ノアツマツテアル如ナト云心ソ

(三43ウ)

此ノツミヲシテ官トモハガレタ者ガコ、ニヨチアツマリテイ

ルソソコカラドコエモ又イテホウコウシテスクールソ(一50ウ)

〔落ツル〕道ニヲチテアル金ヲヒロウテトルコトナカレト云タ

ソ(五54ウ)

衛ノ君ノ狄ノエヒスニホロボサレテ漕ト云所ニヲチ(≡逃げ

延び)テイラレタソ(二58ウ)

〔付ク〕菊ハ花カ飛ヒヲチノヌソシボウテ枝ニツイテアルソ

(三二28ウ)

大夫ガハタヲタテタレハ：賢人カ来リアツマツテハタノモト

ニツイテイタソ(一78ウ)

〔止マル〕桃ヲ取テ上カラ下エナケタソ下ニトマツテアツタ

(四716ウ)

鳥居ト云ホドニ鶴ガ此ノ上ニトマツテイタソ(九62ウ)

〔任スル〕質帝ハヲサナイソ梁ニマカセテアツタ(≡常々政治

を任せていた)ソ(二662ウ)

天命ノサタマリアルコトワリヲトツクニ知タラハ天ニマカセ

テイウスル者ヲ(≡天に任せておくのが適當であるのに)

ソ(一三34ウ)

〔マジル〕水草交ハ水ト草トノマジツテアル所ヲ云ナリ(一〇2ウ)

人間ニイタハ道ノコトヲナマラコナイニスルソ俗ニマジツテ

イルホトニソ(一〇29ウ)

このようにテキルは意志動詞の性格を有するので、テキル自体に、意志・願望・命令表現を伴う用例が現れる。

〔意志〕晉ノ時ニ七人ノ名士云イ合テ隱居シテ竹ノアル林ニイ

ヲリヲ結テイウト云テ七人竹林ト云所ニイタソ(二812ウ)

人ガツラエツワキヲハキカケハノコウテキレイニシテコラエ

テイウスト云タソ(三三24ウ)

〔願望〕杜ガソサウナカヤフキノソツトシタ堂ヲツクツテヒザ

ヲ入テイタイト云タレハ(七49ウ)

水竹ノアルカタカケナソツトシタ居所ヲアマノウテイタイト

云タソ(一三48ウ)

〔命令〕齊ノ景公臣下ノ晏嬰カ家市ノソハニアリ地形ヒクウテ

シミツイタ所ナリヨイ高ウハレトシミツカヌカワト

シタ在所エ家ヲ作テイヨト云エタソ(二950ウ)

西江ノ水ヲコ、エ大河ノキレテトコエモミチアフル、ヤウニ水ソ、イテフナライカサウズソ待テイヨト云タソ(四九四ウ)また、テイルの動作主は主に人間であるから、尊敬の助動詞が下接する用法も認められる。

9 舜ノ歴山ト云山ニハタケナト打ヒラキタカエシテイラレタニ父母舜ヲニクンタソ(九六五オ)

10 年ヨツトラハ黄帝ノ如ク崆(峒)山ニ道ヲトウテ隱居シテイラレウズト云心ソ(一五1オ)

11 イヌルヲ人カマツトトマツテイサシメト云エハチト、マルヤウニシテ又ソロ／＼トシツカニアルヤウナカハシル馬モエライツカヌソ(四八29オ)

一方、(テ) アルには尊敬語を承ける用例(12~14)はあつても、アル自体に尊敬の助動詞が下接する用法は見られない。

12 吾ヲヤハアノ雲ノカ、ツタモトニ舎アリソコニイラレテコソアルラウ(二七33ウ)

13 将作ノ官ノ所ニ匠ノ字ハアレトモ匠策トシタコトハナイン事文ヲミテカ、シマシテソアルラウメ(三八11ウ)

14 此ノ詞ヲ御覽シテ太宗ノ奇特カラシム／＼テコソアルラウ(五三36オ／ウ)

このように、(テ) キルは補助動詞化しても、本来の意志動

詞としての性格を帯びている。補助動詞ではないが、次の用例のキル・アルも意志的・非意志的という観点からその相違を説明できる。

15 ヨイ魚ハカクレテ淵ノソコ／＼ニイルソ小魚ハウキテ、アラワレテ渚ニアルソ此モ賢人ハ身ヲカクシ小人ハネリデ、カケマワルニタトエタソ(二九33オ／ウ)

多分に擬人法的ではあるが、「ヨイ魚(=賢人)」は自分の意志で水底に身を潜めているのに対し、「小魚(=小人)」は何の考えもなしに、うかうかと水面に浮き出ていることを、賢人と小人とになぞらえ、キル・アルで表現し分けられていると推定される。

五 「テキル」の用法(二)

前節では、テアル・テキルの相違を、非意志動詞・意志動詞の観点から述べた。次にアスペクトの面ではどのような相違があるかについて検討する。

テアルは「存続」の用法のうち「存在(既然相)」を表し、状態性・恒常性・完了性に三分類されることを指摘した。それに対し、テキルは「継続(進行相)」を表す。まず、テアルが状態性(現にそうある)を表すのに対し、テキルは、進行相を

表す。すなわち、動作動詞を承けて、その動作・行為が現に継続・進行中であることを表す。総じて、その時そうしていたという場面性を伴う。瞬間動詞（変化動詞）の場合は、その結果の存続を表すが、ここでは両者を区別することまでには立ち至らない。また、以下テキルと対照して挙げるテアルは、状態性の用例のみとは限らない。

「愛スル」神龍カ身ヲカクイテ吾身ヲテウホウト思テ愛シテイ
タソ（二四63ウ）

蓮池ニ花ノサイテクンジワタルヲ僧カ愛シテアツタレハ（||
常々賞翫していたところ）池ノ神力現シテ僧ヲ呵シタソナセ
ニ吾カ池ノ花ノ香ヲヌスムソト云タソ（四九19オ）

「生マルル」伊（尹）ハ空桑ノクワノ木ノナカニウマレテイタ
ソ（九41オ）

人ノ此ノ世ニウマレテアルハ木ニサイタ花ノ人ノケツコウナ
ザシキノ上ニ^ウヲキ又ハキタナイ西淨ノイエノウエニヲチタト
同心ソ（二三13オ）

「隠ス」市町ノ魚肉キリサク者ノアイダニマシツテ身分ヲカク
イテイラレサウラウト云タソ（一七14オ）

李カ夢ニ一人ノ父老カ夢ニミエテ云タソ吾ハ湖ノソハニ形ヲカ
クイテアラウ（||すでに身を隠しているだろ）ソ（三五6ウ）

「来ル」五日メニ良ガイタレハ老人ハサキニキテイタソ

（一〇33オ）

貧ニシテカナシウシテイウヨリ州ノ守護ノ所エキテアラハ
（||来て仕えているなら）ヨイコトアラウト云タソ（二五44オ）
「立ツ」サキカ水辺ノ沙石ノ上ニ一足カゞメテ立テイイルソ

（五三31ウ）

高イ岩ノアラ／＼トシテイインゾト立テアルハ（||聳えているの
は）劔ライイクツモヌイテソロエテタテ、ライタ如ナソ

（二四34オ）

「楽シム」瑟ト云琴ヨリナラ上ノ物ヲヒイ^マ楽ヲシテタノシンテ
イタヲミタソ（二四51ウ）

風雨時ニシタガイ五谷豊年ニシテ君ノ無為ノ政ヲタノシンテ
アルヲ自得ト云タソ（六7ウ）

「止マル」ソコノ学館エ鸞カキテトマツテイタソ（三四37オ）

桃ヲ取テ上カラ下エナケタソ下ニトマツテアツタ（四七16ウ）
「並ブル」ヲウセイノ中ニ同シヤウニ肩ヲナラヘテイタコトソ

（三六27オ）

群玉一山ノナラウテ多ウ玉ノ多ナラベテアルニタトエタソ

（五64ウ）

「成ル」愛スル^{ヲモイモ}妾ヲツレテ南方ノ湯台ノ守ニナツテイタソ

(二七六ウ)

富貴ニナリテアレハソノ隣モニキワシソノトナリノニモモツ
ハラトスルソ (二四四ウ／47オ)

〔読ム〕聖人ノ書ニ打ムカウテヨウテイタソ (四〇23オ)

コ、ラニ (＝日本では) 木瓜^{ホケ}トヨムデコソアレ (＝通常そ
う読んでいる) (四七13オ)

次に、テアルの特徴として「恒常性(常にそうある)」を指
摘した。それとは対照的に、テキルはその表す動作・行為が一
回のなものであることが多い。すなわち、その時その場でそう
していたことを表す。一回性を表す文法的な指標としては、「所・
時・ニ(接続助詞)・タレバ」などを伴う用例が認められる。
すなわち、「～していたところ・とき」の意である。

〔トコロ(エ)〕1九月九日ニ淵明ガ三径ノ菊ヲミテトセント

シテイタ所エ王弘ト云者カ酒ヲモチキテス、メタソ

(二二63オ)

2フネヲ岸ニツナイテ坐シテイタ所工官人ガキテ色々ノコト

ヲトウタソ (二二82オ)

〔トキ(ニ)〕3虞カ羞ノエヒスノ猛勢ニトリマワサレテイタ

時二人カセウシナラキイテソレヲ問タ時ニ云タ語ソ

(二五5ウ)

4美里^ミト云所楼ニ入ラレテイラレタ時ニ楼ノ中テ伏羲ノ天地

心ノハカリカタイコトヲタ、一点ヒイテヲカレタソ

(二四28オ)

〔ニ〕5ハタシテ渭水ノ北ニ太公カ釣シテイタニ文王ノアワ

レタソ (五三47ウ)

6ヒルネムリシテイタニ碁ヲ人カ打ゴ石ヲハチノト打声ニ

ヲトロイタソ (三七21オ)

〔タレバ〕7康カ琴ヲ引イテイタレハ夜半ホト二人カキテシ

ツカニ共ニ雑談シタソ (四〇56ウ)

8漁人ノツリウ人カ舟ヲ馬(当)山ノモトニトメテイタレハ

タチマチ一ノ大ナル亀カ江中カラデ、直ニ山上エアガツテ

亀ガ四方ヲミマワイタソ (二九9オ)

前節でテアルの恒常性に関連して、偶然確定「トリハヅイタ
レバ」に対し、「トリハヅイテアレハ」は恒常確定であること
を述べた。テキルの場合も、右の用例7・8に見られるように、
「テキタレバ」は偶然確定である。恒常確定の場合は、次のよ
うに「テキレバ」の表現形式になる。ただし、それは「已然形
+ば」の表現形式が恒常性を意味するのであって、テキル自体
が恒常性を表すものでないことに注意する必要がある。

9物ヲタラカサイテコラエテイレハ必益^{マズ}コトアルソ (四三1ウ)

10 心ヲシツメテラサイテ坐禪シテイレハ天地モ三千世界モ心
ノ中ニアツマルソ (三一 25ウ)

最後に、テアルが完了性（既然相）を表すのに対し、テキルは未完了性（進行相）を表す。すなわち、これまでの引用例から知られるように、テアルは動作動詞を承ける場合、そのことが既に実現・完了していることを表すのに対し、テキルは目下進行・継続中であることを表す。ただし、ここで言う完了性・未完了性は perfect・imperfect とは異なる概念である。⁸⁾

過去「タ」を伴う「テキタ」は、過去のある時点において、そのことが進行・継続中であつたことを表す。それは葡語の「不完全過去」に対応する。「不完全過去」は「線過去」とも言われ、過去のある時点において継続していた動作・状態を表す表現形式で、現代日本語の「ていた」に相当する。

次の2例は『長崎版日葡辞書』の用例であるが、「estar (いる)」の3人称複数形「不完全過去形」[estauo] が用いられている（日本語訳は『邦訳日葡辞書』に拠る）。

出居には算を乱いた如くに死人どもが臥して居た。
Estauo na camara os mortos alastrados como aqueles
posinhos das fortes baralhados. (部屋の中には、あの運
勢占いの木片「算木」を乱したように、死人がごろごろ転

がっていた) (159 Midaxi)

死骸あまた転(まろ)び合うて居た。Estauo muitos
corpos mortos caldos em hum lugar. (死体が同じ所にた
くさん倒れていた) (152 Marobi)

ただし、右の2例は結果の存続という状態を表す。結果の存続か動作の進行か、その差異には微妙なものがあるが、『玉塵抄』の場合、次のように、動作・行為の進行・継続を表す用例は多数認められる。

「打ムカウテイタソ (三 49ウ)」「タキ木ヲ刈テイタソ
(二 37ウ)」「ユルリヲカコウテイタソ (二 6ウ)」「サ
キエス、ンテイタソ (四 33オ)」「牛ヲヒイテイタソ
(五 40ウ)」「ミツメテイタソ (二 64ウ)」「待テイタソ
(四 23ウ)」「茶ヲワカイテイタソ (五 38ウ)」「釣竿ヲ
タレテイタソ (四 625オ)」「ツイチヲツイテイタソ夫
(二 17オ)」

以上を要約すると次のようになる。テアルは存在詞（状態動詞）であるから、上接語も原則として非動作動詞（非意志動詞）が現れるのに対し、(テ)キルは元來動作動詞であるから、上接語も動作動詞（意志動詞）であるのが一般である。

テアルの主語は非情物をも含むのに対し、テキルの主語は有

情物(多くは人間)に限られる。したがって、テキルには意志・願望・命令・尊敬表現が現れる。

アスペクト面の相違としては、まずテアルが状態性(現にそうある)を表すのに対し、テキルは、その動作・行為が継続・進行中であることを表す。

次に、テアルが恒常性の性格を有するのに対し、テキルの表す行為・行動は、一般にその時その場での一回的なものである。

第三に、テアルが完了性(既然相)を表すのに対し、テキルは未完了性(進行相)を表す。以上の五点を述べた。

六 「テアル」の用法

ヨリはキルと対比され、先学諸氏により種々考究されてきたので、さまざまな解釈がなされている。本稿は、『玉塵抄』の、主としてテアルの用例に焦点を当て検討する。

この時期の「(テ)アル」は一般に「卑語」として把握されている。「卑語」を下位待遇表現に用いられる語と理解すると、それは身分関係という、固定的な観点から捉えた表現ということになる。しかし、『玉塵抄』の具体的な用例を見ると、右のような意味での「卑語」に属さない用法が大方を占める(以下、

「テアル」は用例数が少ないので、アル単独の用例もまま交える)。

まず、漢文訓読語としての用法がある。

1 美^{ハム}簡文公^ラ也徒居^{ウツテラレリ}二楚丘^ニ(二16ウ)

2 尔^{ナンチモ}亦^モ安^{イツクシ}能^{ウツ}鬱^ツ々^ツ居^レ此^{コノ}乎^ニ韓信^ニキハウモコ、ニ

ノコリナニコトモセイテ鬱々ハドチコモリテモウ〈トシ

テ此^{ココ}ニイウズコトカトイワレタソ(一11ウ)

3 居^{ラレ}レ寵^ニ思^ヘレ危^キヲトアリ高位ニイテ人ニ寵愛セラル、ト

モアフナイ心ヲモテ…(八28ウ)

右のように「居」を漢文訓読語としては「ヨリ」と付訓し、

抄文では「キル」に置換している。さらに、次の用例では「居」を「居ス」と音読みしているが、抄文ではキル・アルがともに対応している。

4 (辞^シ)^レ尊^{ウツ}居^シレ卑^{ヒキニ}(辞^シ)^レ富^ツ居^スレ貧^ニ 賢人君子ハタ

ツトイ高位ヲハシンシヤク下位ノヒクイ位ニイルソ富貴ヲ

ハ辞^シテ貧賤ヲアマナウテイルソ(二一28ウ)

5 辞^シレ富^ツ居^レ(貧^ニ)…賢人君子ハタノシイ方ノコトヲサケ

ノガレ辞^シテ貧^ニヲ家ニシテアルソ(二六17オ)

用例4・5から知られることは、キル・アルがほぼ同義であり、しかも、「賢人君子」が主語であるから、アルに「卑語」とい

う意味合いはあり得ないことになる。したがって、キルが口語的、ラルが文語的という文体差があるとすると、ラルが抄文中に用いられている場合、「卑語」でない場合もあり得る。たとえば、次の諸例は文脈からして「卑語」とは解し得ない。

6 盤(桓)ハハツタトシタ心ソ身モチ威儀タウくトシテ不
断真実ヲ家ニシテラル心カ(三三三43オ)

7 隣モナク人ケモナイ閑々トシタ所ニヒトリトセントシテラル者ソ(三八27ウ)

8 鮮(卑)ハエビスノ名東夷ノ枝葉ナリ鮮卑ト云山ニヨツテ
住宅シテラルソ(四六43オ)

9 盧敖カ北海ノ上ニ龜ノコウニノツテラツタラミタコトソ
ノムソ(四七6ウ) (二二26ウ)

10 魚ハ岩石ノカゲモクサノ小カケニラル(本動詞)コトヲコ
ノムソ(四七6ウ)

11 日ナン竿ト云ハ／アサヒノコトソ：竿ニタケホト上レトモ
牛ノ子ハマダネムツテラルソ(三三三17ウ／18オ)

このように「卑語」とは解し得ない用例が認められ、その用法はこれまでに見て来たキルに近似する。キルとラルとの職能差にはかなり微妙なものがある。

しかし、抄文において、テラルには「卑語」としての用例が、

やはり多数認められる。ただし、「卑語」という術語から連想される下位待遇表現ではないのが一般である。主な事例を幾つかに分類して説明する。

まず当事者ではなく、当事者の置かれた状況が、通念上、好ましくないものとして「卑語」の対象となる用法がある。

12 志モアツテ義理ヲ存シ学モン方ヲ心カクル者ハ貧デヨイ者
モクワズ：ヤセウエテラルソツカレハテ、ラルソ：世界ヲ
ソシツタ詩ナリ(六37ウ)

13 此ノ詩ハ衛ノ莊公ノ賢人ヲ不用ホトニ山ノカゲ谷ノヲク
ニカ、マリラルソソレヲソシツタソ(五〇51ウ)

14 天下太平ニナリテ弓矢イラネハ信カヤウナ者ハイラヌソカ
タカゲニヒツコウテラルソ(二二33オ)

15 エイノ人民ミナニゲチツテ漕ト云ソツトシタ小村ニアメツ
ユニウタレテラルソ(八20ウ)

16 人ノウマレテ世ニスムコトハウレイカナシミトトモニシテ
ラル者ソ至楽ヲハ知ヌソ欲ニカラマカサレテ苦ノ憂ニカ、
ワリホダサレテウレイト骨肉ニナツテラルソソレヲ樂ト思
ナリ(一六30ウ)

17 イキテイタ間欲心生死煩惱ニ緊縛セラレテラルソ(四六23ウ)
用例12に「世界ヲソシツタ詩ナリ」とあることから明らかで

あるが、志のある学者が飢餓貧困に苦しめられているような状況を非難し、それを、「ヤセウエテタルテタルソツカレハテ、タルソ」に託している。用例13も「ソレヲソシツタソ」とある。その非難の対象は賢人を登用しなかった荘公にあり、それを「カ、マリヲル」で表現したものである。「此ノ詩」とは『詩経』中の詩を指すが、清原宣賢講述『毛詩抄（兩足院本）』には「此考槃ノ詩ハ衛ノ莊公ヲソシツタソ：莊公ノ賢者ヲ用ラレヌ程ニ賢者カ谷アイニ引コウテ居ルソ（三24ウ）」とある。

右は当事者の置かれた状況を批判の対象としたものであるが、逆に当事者の行為行動が、その場の状況・雰囲気になさわしくないものとして捉えられた用例がある。

18 ソノ中ニ一人サイ下戸カイヘウナ者ガアツテ酒モノマイデ
 スミエムイテアレハ満座ノ者ガアチヲウルウシテタノシミ
 菟コトナイソ（一五14オ）

19 門ヤクセキトメタヲヲシ破テ酒宴ノザシキノソバエイテ立
 テヲツタソ（二九54ウ）

用例18は、下戸が酒宴で慥然としていて、折角の雰囲気をごわしてしまふ違和感をラルで表現したものである。用例19は鴻門の会の場面である。樊噲が門番の制止を押し破り、盾を脇挟んでその席に乗り込んだことが、酒宴の場に相応しくないもの

として表現されている。

以上が、当事者の置かれた状況やその者の行為行動への批判をテタルで表現したものである。

次に、当事者自身の行為行動や態度を批判の対象とした用例が見られる。

まず、その者の行動や態度の傲慢さ・尊大さを非難した用例が挙げられる。

20 夷狄ノエビスノ国十六国北方ノ晉魏ノ二国ノアイタニヲシ
 入テ雑居シテイテ吾々一城ヲカマエテ王ト称シテヲツタソ
 （三三8ウ）

21 手カケ者ヲ寵愛シテホンソウセラル、ホトニテカケハヲゴ
 ツテタカアガリシテラルソ本ノ女莊姜ハステラレテイラレ
 タソ（二五46オ）

第二に、課せられた任務など、なすべきことをせずにいる怠惰さを非難した用例がある。

26 ナス功モナウテ大俸禄ヲウケテ大グライシテ腹ヲ大鼓コノ如
 ニホツテトシテラルヲソシツタソ（三二47オ）

27 ヨイ所ニ家ヲツクリ戸ヲシテアケツフサイヅシテサムイア
 ツイヲサケテラルニナセニ君ノフシンニイソイテ功ヲナサ
 スソヌタニヤスミヲツテハナニヲ以フシンスルトハイウウ

ソ (一四60オ)

28モノクサイ農カナニモセイデ身ヲヤスウシテヲツテ辛勞モ

セヌソ (五4ウ)

第三に、その行為自体を愚かなものとして批評する用例がある。

22愚公ト云者アリ九十二ナルソ山ニ向テラルソ／＼山ヲウツ

サウト云グチナ者ナリ其ノヤウナニヨツテ愚公ト云タカ

(二一8オ／ウ)

23財宝ヤ銭ヲ多ウ以テハカナシイ貧ナ者ニホドコシ人ヲラスク

イニキワスコトヲホメタツトシタコトソサナイ者ハ銭ヲ守

テメシウトノ虜ヲニガサジト守テラル者マデソ (二七24オ)

24ミヨ／＼コノ老 (痴漢) ホシイ酒ヲコラエテラルソヲサエ

テノマセタソ (一一51ウ)

25ケウアス二日ソトエデイテセメツメラレテ内ニヒツコウテ

ヲラハラノレト内ニ死テヲラウソ (一一57オ)

右は人物が卑語の対象となつている (用例25は擬人法)。虎・

狼・龍などの獣類も (テ) ヲルで表現されるが、それは人間に

何らかの危害や迷惑を及ぼす存在として捉えられた表現であり、そ

うでない場合は、次の用例30・32の参考にしたようにテキル

が用いられる。

29ウエテナニガナクワウト思ウ狼カ美物ノ多イ庖丁所ヲ守テ

口ナメツリシテ守リツメテラルソスキアラハトツテクワウ

ト思テマフルソ (三一41ウ)

30鴉臭^テ当^テ風^ニ立^ツト詩ヲ作テソシツタソカラスハタ、サエク

サイニ風ヲモテニ立テヲツタホドニ一段ワルクサウテ鼻ヲ

カ、エタト作タソ (一38ウ)

cf. 鴉カイツモノ定ヤドノトマル木ニキテネヨウイヲシテイタ

ソ (四三12ウ)

31无道ナトラヲウカメヤウナ无道ナヲソロシイ者ハヤミチ路

次ニフサイデラルソ (二〇14ウ)

32岸ノ上ノクカニアル虎ハ人カヲソレスソタ、水ノ中ニワタ

カマツテラル龍ガコワイヲソロシイ者ナリ (五20オ)

cf. 此ノ卦ノ位ヲ飛龍ト云ソ一ノ下ノ卦ヲ潜龍ト云ソ淵川泥水

ノ中ニヒソマリワタカマツテイル龍ソ (一九46ウ)

以上、「(テ) ヲル」が「卑語」として用いられるという場合、

その者の行為・行動を何らかの意味で非難すべきものとして捉

え、それを「(テ) ヲル」で表現したものと考えられる。「卑語」

という術語から連想される、その者の存在そのものを卑しめて

いる用例は次の2例に過ぎない。

33鳳凰ノ老タカ鳳池ノアタリニ足モタ、イデヘラフシウスク

マツテトチエモ飛ルコトモエセイデラルソ：イカウソシツ

タソ (三一 31ウ)

34 木二樗^{チヨ}ト云アリネデリスデリフシダラケデミ山ノラクニナ
ン年ト云コトモナクキラレイテ長イキシテラルソ

(四四 1ウ)

金水敏氏も引用紹介されているが、来田隆氏はキルとワリの相違を次のように説明される。^①

キルは「動作(状態)を客観的に記述する」ものであり、ワリは、「動作(状態)のあり方を主體的・意思的行為として描写する」ものと言うことができよう。(110頁)

存在(状態)を主體的行為として描写するということは、その「あり方」に対する話し手の立場からのなんらかの価値判断(評価)がこめられていることを意味する。(108頁)

金水氏の指摘されているように、右の説明で「主體的・意思的行為として描写する」と話し手の「価値判断(評価)がこめられている」とことは別個の概念であって、直接に結びつくものではない。しかし、キルが言語主体の価値判断を交えずに、コトガラをコトガラとして客観的に描写・説明するのに対し、ワリは、そのコトガラに何らかの価値判断・評価を交えて記述すると捉えるならば、右の来田氏の説明は、『玉塵抄』の用例と合致する。

さて、現代語では「おる」は「丁重語」と言われる。すなわち、「おります」の表現形式で、話し手もしくは話し手の身の側に属する者の行為を、聞き手に対してへりくだって表現する用法が一般である。『玉塵抄』の場合、「丁重語」は次の2例が見られるだけである。

35 某カスム所ハ廉直ト謙讓トノニヲカネタソノアイタニワリ
サウラウト答タソ (三五 75オ)

36 吾ハ木ト雁トノ材不材ノ中ニヲラウカト云タソ (二二 40オ)
「丁重語」の日本語史上での位置づけは、今後の課題となる。

以上テアル・テキル・テラルの用法を概観したが、最後に冒頭に掲げた次の用例で三者の相違を述べておきたい。

チイサイ用ニタ、ヌ木ハ山ノ上ニ^aタカアカリシテアルゾ。
正シウモナイ邪佞ナ者ハ、高位ニ^bタカアカリシテアルゾ。
蓮花ノ、イサキヨイ、花ノ君子トイワレタヨイ花ハ、サワ
ベノアタリニ、^c下位ニカガ、マツテイタソ。(一七 65ウ)

aは「木」は非情物であるからアルを用いた。「チイサイ用ニタ、ヌ木」は切られることが無いので、山頂近くに生い茂っていることを述べたものである。bは「邪佞ナ者」が高位にあることを非難し、それをアルで表現している。cは「花ノ君子」と言われた蓮花になぞらえ、清廉な臣下があえて下位に身を潜

めていることを述べたものである。

三者が同一の動詞に下接した用例は、「集マル・生クル・隠ルル・立ツ・成ル・入ル・伏（臥）ス・守ル」の8語が見られる。すでに引用したものを除き、次の4語を挙げておきたい。

〔生クル〕

父ノイキテアルニ母カ死スレハ喪服為^レ母^ノ齊^シ衰^イスルソ[：]齊衰ハ服ノ名ナリ（三一・22ウ）

孔子ハ七十三ヤラテ死レタソレマテ母ノイキテイラレハスマイソ（二四・55オ）

現在ハイキテラル間ハ云ニヲヨハヌコト三世ノコトヲスキト知タソ（三45ウ）

〔入ル〕

穴ヲホツタレハ穴ノ中ニ石テ蓮花ナリノ灯ノ油スル椀ヲ三ツ得タソ三ノ椀ニ油カ入テアツタソ（二二・57オ）

上古ハ家ハナウテ土ヲホウ^{（ホウ）}テ穴ヲヒロウシテソレエハイツテイタソ穴ニ居ルコトソ野原ニモフシテイタソ（一三・46ウ）

鼠ハ土ノ穴ヲホツテ入テラルホトニ土ノ中テ君主ナルソ（二八・16オ）

〔伏（臥）ス〕

馬ヤニツミ板ノ上ニフシテアレトモ心ハ千里万里ヲカクル気

ガアルソ（一六・34ウ）

劉備ノ草廬ノ中ニ孔明ガフシテイタヲミテ臥龍ナリ／トイワレタソ（一四・59オ／ウ）

武士大丈夫／ト云者ハ大鳥ノトヒアカルヤウニミヤコエモノリ名ヲアケ高イ官ニモアカル気ヲモタイデハソ小鳥ノメントリノ草ノ中ニフシテラルヤウデハカナウマイソ（八・7オ）

〔守ル〕

葉向日不^レ令^メ照^サ根^{モト} 日ノ光ヲ葉テカクイテモトヲテラサセヌソマコトヲ守テアル心ソ（九・45ウ）

コケサルカ火ノソハニ火ヲ守テイタヲミタイ火カモエソハエ付カセウ斯拉ウテ守タソ（二九・29オ）

銭ヲツミカサネテ以タヲタノシウテチツトモウセチラセイテラクハソレハタ、一向銭マブリマテソメシウトヲ守テニカサジトシテソハニ付テ守テラル者マデソ（三八・5オ）

本稿で述べた事柄の要点は左のとおりである。

- 一 「存続」用法を「存在（既然相）」と「継続（進行相）」に分けた場合、テアルは「存在」、テキルは「継続」を表す。
- テアルの用法は、さらに状態性（現にそうある）・恒常性（常

にそうある)・完了性(すでにそうある)に分けられる。

テアルは非情物をも主語とする点がテキルと異なる。また、(テ)アルは存在詞(状態動詞)であるから、その上接動詞は非動作動詞(非意志動詞)が大半を占める。

二 テキルのキルは元来「座る」の意味の動作動詞(意志動詞)であった。補助動詞テキルとなっても、元来の動詞の性格を有する。すなわち、上接動詞は動作動詞(意志動詞)が多数を占める。したがって、意志・願望・命令表現を伴うことがあるのに対し、(テ)アルは元来存在詞であるから、それらを伴わない。

三 テアルが恒常性(常にそうある)を有するのに対し、テキルはその行為行動がその場面での一回限りのものであることが多い。また、テアルが完了性(すでにそうある)を表すのに対し、テキルはその動作・行為が進行中であることとを表す意味で、未完了性に属する。

四 テアルは従来「卑語」として扱われてきた。『玉塵抄』の場合、その者の置かれた不合理な状況に対する非難や、その場面にそぐわない行為、傲慢・尊大・怠惰な態度や愚かさなどを批評した用例が一般であり、上位・下位という待遇関係で捉えることはできない。

五 テアルは、非情物を主語とせず、主として人間を主語とする意志動詞(動作動詞)を承ける点で、用法がテキルと近似する。来田隆氏が指摘されているように、テキルがその行為行動を客観的に描写説明するのに対し、テアルは、対象となるコトガラに言語主体の価値判断が加えられている点がテキルと異なる。

〔注〕

〔1〕「国立国会図書館本(勉誠社複製)」に拠る。「叡山文庫本(清文堂複製)」も参看した。

〔2〕金水敏氏『日本語存在表現の歴史』(二〇〇六年 ひつじ書房刊) 次の御論考からも多くの教示を得た。

柳田征司氏「近代語の進行態・已然態表現」(近代語学会編『近代語研究 第八集』一九九〇年 武蔵野書院刊 所収)

同氏『日本語の歴史2 意志・無意志』(二〇一一年 武蔵野書院刊)

なお本稿の動詞の分類・名称は、おおむね次の御論考に従う。

金田一春彦氏「国語動詞の一分類」(日本語動詞のテンスとアスペクト) (同氏編『日本語動詞のアスペクト』(一九七六年 むぎ書房刊) 所収)

〔3〕一般には「已然態」「進行態」と称するが、小田勝氏の「已然相」「進行相」のほうが術語としては適当なので、それに従う。同氏『実例詳解古典文法総覧』(二〇一五年 和泉書院刊) 122頁。

- (4) 拙著『玉塵抄の語法』(二〇〇一年 清文堂刊) 第一章第一節「玉塵抄の中性動詞―「読ムル」の用法」を参照せられたい。
- (5) 拙著『抄物の語彙と語法』(二〇二一年 清文堂刊) 第一章第三節「玉塵抄」における「らう」「つらう」「うずらう」の用法」を参照せられたい。
- (6) 拙著『玉塵抄の語法』第四章第二節「玉塵抄における確定順接表現」を参照せられたい。
- (7) 山下和弘氏に「少なくとも江戸時代前期のテイル・テアルのイル・アルは独立した動詞である可能性が高い」旨の指摘がある。同氏「タリの衰退とテイルの文化化の相互関連」(福岡女子短大紀要)二〇一九年二月) 82頁。
- (8) アスペクトから見た「テアル・テキル」の用法に関しては、左のような論考がある。本稿の記述とは異なる指摘も見られるが、ここでは論文名を紹介するにとどめる。
- 福島健伸氏「中世末期日本語の「テイル・テアル」について 動作継続を表している場合を中心に」(筑波日本語研究 5) (二〇〇〇年)
- 同氏「中世日本語の「テイル・テアル」と動詞基本形」(国語と国文学)二〇〇四年二月)
- 福沢将樹氏「事態継続と期間継続」(日本語文法史研究 4) 二〇一八年 ひとつし書房刊)
- (9) 拙著『抄物の語彙と語法』第四章附節「『キリシタン版日葡辞書』概要」322頁を参照せられたい。
- (10) 「注」(2) 202〜204頁。
- (11) 来田隆氏『抄物による室町時代語の研究』(二〇〇一年 清文堂刊)

「付記」初稿に関し、本誌の査読委員の方から有益な御助言を賜った。深甚の謝意を表する。本稿はテアル・テキル・テラルの用法の相違に焦点を当

てたものであるから、用例数の多いテキルに関しては、その意味用法の全
てには及んでいない。他日を期したい。